

多人数クラスにおける「話す」授業の試み

— 日本語中級前期「話す」の授業報告 —

ボイクマン 総子

要 旨

本稿は、中級前期レベルの「話す」授業の実践報告である。この授業は、受講者が31名と多かったため、その対応策として「学習者同士が話す機会を設ける」「宿題を充実させる」「ボランティアの学生を活用する」「会話コンサルテーションを行う」といった4つの試みを行った。学生ボランティアには、シャドーイングの練習相手、および、会話の相手になってもらった。学習者同士が話す機会を多く設けることに対しては学習者によって賛否両論があったが、宿題の充実とボランティアの学生の授業参加は学習者から肯定的評価を得た。会話コンサルテーションは、授業担当者が個々の学習者の日本語レベルを把握するのに役立った。

【キーワード】 多人数クラス 話す能力 学生ボランティア 会話コンサルテーション

Management of a Large Size Speaking Class

BEUCKMANN Fusako

【Abstract】 This is a report about a speaking class of pre-intermediate level. Because 31 students enrolled this class, the following four countermeasures were employed against the problems associated with large classes: creating as many speaking opportunities among students as possible; assigning homework both rich in quality and quantity; involvement of native speaker student volunteers as conversation counterpart and shadowing practice partners; and conducting conversational consultations. Opinions were divided about creating speaking opportunities among learners. Students positively responded to the amount and content of homework and the participation of native speaker volunteers. Conversational consultations were useful for the teacher to exactly evaluate each student's speaking abilities.

【Keywords】 large size class, speaking ability, student volunteer, conversational consultation

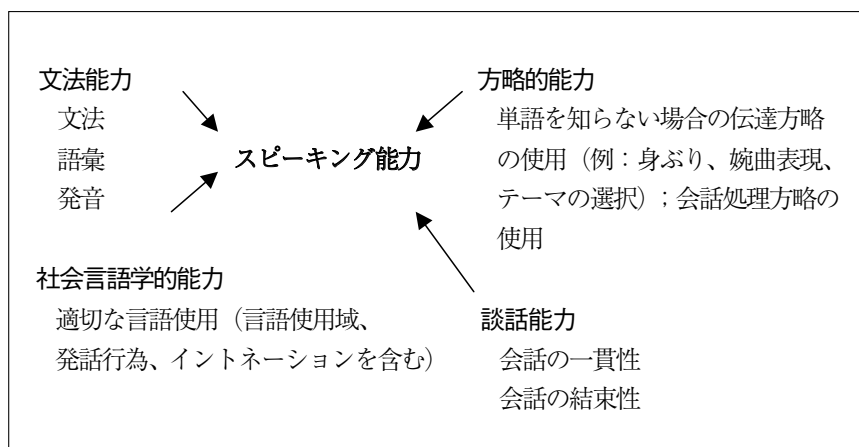
1. はじめに

本稿では、筑波大学留学生センター日本語補講コース¹の外国人留学生を対象とした中級前期レベルの「話す」授業に関する2007年1学期(4月～6月の10週間、週1回×10コマ、1コマ75分)の授業についての報告を行う。この授業は受講者が多く、それに伴い学習者間の話す能力の開きも大きかったため、その対応に苦慮した。そこで、本稿では多人数のクラスで「話す」クラスを行うという本授業でのいくつかの試みについて述べたい。また、2007年1学期は日本語補講コースの授業科目編成の最初の学期であったため、この学期に行われた授業の内容、授業運営上の問題点をこの機会に整理し記述しておき、それを次学期以降の授業改善の資料として役立てたいと思う。

2. 「中級前期話す」の授業概要

2.1 授業の目標と内容

Scarcella and Oxford (1997) は、Canale and Swain (1980) と Canale (1983) が唱えた、「コミュニケーション能力には、文法能力、社会言語学的能力、談話能力、方略的能力の4領域がある」という枠組みを援用し、流暢な第二言語話者が持つ話す能力の要素として、【図1】に示すような要素を挙げている。



Scarcella and Oxford (1997:222)

【図1】 スピーキング能力の要素

中級前期レベルの学生は、上述の能力のいずれについても何らかの課題を抱えているが、本授業では、特に文法能力と社会言語学的能力の養成を目指すことにした。一般に、中級前期レベルでは、文法能力に対応する問題点として、①自分が言いたいことを表すための語彙や表現が豊富ではないことが挙げられる。また、社会言語学的能力に対応する問題点

としては、②基本的な日常の出来事については日本語で用を足せるが、上下や親疎などの人間関係、カジュアル・フォーマルなどの場面に応じたスピーチスタイルを維持できない、③初級で習った基本的な文法項目は理解し使うことができるが、その縮約形などのくだけた表現に関する知識がない、もしくは、知識はあっても適切な音調やイントネーションで発話できない、などの問題点がある。そこで、筆者は上述の問題点に対応する形で、本授業の目標を以下のように設定した。そして、この3つの目標に到達できるよう【表1】に示すような授業内容を設計した。

〔授業目標〕

- ①トピックについての語彙を増やし、まとまった内容が話せるようになる
- ②日常よく接する場面において話し相手や状況に応じた話し方ができるようになる
- ③話し言葉特有の表現について理解し話せるようになる

【表1】 「中級前期話す」の授業内容

	授業の前半 (約 20 分)	授業の後半 (約 55 分)
1 回目	話し言葉① てる、てく、とく	敬語で自己紹介*
2 回目	話し言葉② ちゃ、じゃ、きゃ	特技について話す**
3 回目	話し言葉③ たって、だって	料理について話す***
4 回目	話し言葉④ 引用の「って、て」	観光・地理・産業について話す**
5 回目	話し言葉⑤ 「ん」について	旅行の感想を述べる***
6 回目	話し言葉⑥ 音の変化	人づてに聞いたことを伝える***
7 回目	話し言葉①と②の復習	専門を選んだ理由を話す**
8 回目	話し言葉③と④の復習	失敗について話す***
9 回目	話し言葉⑤と⑥の復習	今後の予定について話す**
10 回目	期末試験	

授業の前半では、『なめらか日本語会話』（富坂 1997）から縮約形などのくだけた表現を取り上げ、学習者がそれらの表現の意味と使い方を理解し、自然な速さとイントネーションで言えるようになるための練習を行った。授業の後半では、まとまった内容について話すことができることを目指し、【表1】に挙げたトピックについての会話を聞き、それを参考にして自分のことについて話すという活動を行った。授業の後半に使用した教材

は、【表1】の*印については『一般日本語 SJ4-1』『一般日本語 SJ4-2』（衣川他 2004）から、***印については『聞いて覚える話し方 日本語生中継 初中級編 1』と『聞いて覚える話し方 日本語生中継 初中級編 2』（ボイクマン他 2006）から抜粋した。

2.2 授業の流れと活動方法

授業開始から終了まで75分間の大まかな流れは、以下の通りであった。

- 前半 0～10分 話し言葉特有の表現について教師が解説
- 10～20分 当該表現を用いた言い換えなどの口頭練習
- 20～45分 会話例を用いたシャドーイングの練習
- 後半 20～40分 トピックについての会話の聞き取りとディクテーション
- 40～55分 トピックに関連する語彙・表現の導入と練習
- 55～72分 トピックについて話す活動
- 72～75分 話したことを短くまとめレポートする（書く）活動

前半の「会話例を用いたシャドーイング練習」は、初回と2回目の授業では、学習者同士がペアになって会話例を読み上げ、それを教師やボランティア学生²がわきで聞いて発音に間違いがあれば修正するというやり方だったが、学習者は書かれた文字を読み上げるのが精一杯で、イントネーションなどの間違いも多かったため、3回目以降は、教師やボランティアのモデル発話をシャドーイングするという活動に変えた。活動方法は、学生6～8人のグループに対して、1人のボランティア学生、もしくは教師が入り、モデルの会話例を自然なスピードで発話し、学習者は書かれた文字を見ずに、それをシャドーイングするという方法を取った。この方法により、自然なイントネーション・音調で発話することが可能になった。また、書かれた文字を見せなかったため、緊張感をもって練習することができ、学習者は非常に積極的にこの活動に取り組んでいた。

後半に行ったトピックについて話す活動では、学習者同士が話す機会を設けるため、3人1組にし、1人はインタビューをする人、1人はインタビューを受ける人、もう1人には2人の話を会話中にメモしておくという役割を与えた。そして、3名全員が役割を交代して与えられたトピックに関連する会話をするように促した。ボランティアの学生には、3人1組の中に入れてもらい、会話の相手になってもらった。そして、授業の最後の3分ほどで、メモしておいた他の2人の話の内容を短い文章でまとめて書くという活動を行った。このように最後に話の内容をレポートするという課題を課したためか、トピックについて話す活動では、漫然と話をするのではなくインタビューする人、される人、レポートする人が、お互いの言いたいことを確認しながら、話を進めることができていたように思う。

3. 多人数に対する対応策

ここでは、授業運営の最大の問題点であった人数の多さとその対応に関する筆者の試みについて述べたい。中級前期「話す」の授業を受講希望した学生数は、初回の授業時には47名と人数が多かった。これは以前の学期より開講科目数が減ったこと、日本語補講コースの受講希望者が増えたことなどによると考えられる。そこで、やむを得ず人数制限をするという措置をとり31名が受講することになった³。それでも「話す」技能を養成するクラスとしては31名と多かったため、その対応策として次のことを試みた。

- ①学習者同士が話す機会を設ける
- ②宿題の充実
- ③ボランティアの活用
- ④会話コンサルテーションの実施

それぞれについて順に説明していきたい。①「学習者同士が話す機会」は、授業後半のトピックについて話すという活動をさせたときの試みである。この活動では、学習者同士3名1組になって話をする（グループによっては、そのうちの1人にボランティア学生が入ることもある）のだが、毎回違う人と話をするようグループ分けに注意した。会話コンサルテーションの際に、この活動に関する感想を聞いてみたところ、クラスメートの流暢な話し方に刺激を受けて、有意義だったという感想を持った学習者もいたが、反面、クラスメートの間違った発話を聞きたくないという意見の学習者もいた。

②「宿題」であるが、多人数のため授業中に各学習者の発話を丁寧にフィードバックすることができないので、それを補う目的もあり、毎回宿題を課した。予習として次回話す予定のトピックに関連する単語や表現を調べてくるワークシートがA4で1枚、復習として話し言葉特有の表現に関するワークシートがA4で4枚ほどという2種類の宿題を毎回課したが、その提出率は非常に高く、最後まで受講し成績が与えられた26名に関してはほぼ100%の提出率だった。提出率の高さにつながった要因は、ワークシートにA・B・Cの簡単な評価をつけたこと、間違いのあった箇所を細かく解説を書いたこと、励ましのコメントを書いたこと、宿題についての共通の間違いや宿題に書かれていたおもしろい表現などを授業で取り上げたこと、などが挙げられるかもしれないが、何よりもクラスメートがまじめに宿題に取り組んでいることに刺激を受けたというのが大きいように思う。

試み③の「学生ボランティア」には、2.2で述べたように授業前半の「会話例を用いたシャドーイングの練習」と後半の「トピックについて話す活動」に積極的に関わってもらった。教師1人が30名余りの学習者の個々の発音やイントネーションを聞き修正することは時間的に不可能であるし、モデルとなる音声なしには学習者自身が自然な調子で発話することはできない。そこで、本授業では、7名ほどの学習者を相手に学生ボランティア1人が自然な調子で会話のモデルを提示し、学習者は各々モデルの音調の通りに繰り返すという

シャドーイングの活動を取り入れた。学習者には自分が伝えたい意図が相手に正確に伝わるようなイントネーションで発話することが大切であることを伝えた。また、この活動の際に、筆者がボランティアの学生に依頼したことは次の3つのことであった。

1. 発音の誤りは、聞いてわかるものであれば、しつこく訂正しない。
2. イントネーションで意味が変わったり、相手が受ける印象も変わったりするので、適切なイントネーションで発話できているかに、注意を払ってほしい。
3. 学習者の中にはうまく発話できる人もそうでない人もいるが、グループの中でその力の差が目立たないように、自分が発するモデル発話のスピード、モデル発話の難易度、学習者にシャドーイングをさせる順番に気をつけてほしい。

このシャドーイング練習によって学習者1人1人の発音とイントネーションを聞いてその場で修正するということが可能となった。また、この活動は学習者が楽しんで取り組んでいた活動に見受けられた。

ボランティアの学生に関わってもらったもう一つの活動は、「トピックについて話す活動」である。この活動では、3人1組の中に入ってもらい会話の相手になってもらった。その際、ボランティアの学生には、英語を原則として使用しないこと、発話のスピードや使用する語彙は特に調整することなく普段と同じように話すよう依頼した。

学習者は、ボランティアの学生の参加を肯定的に捉えており、否定的な意見は聞かれなかった。また、ボランティアの学生にコース修了後にインタビューをしたところ、彼らにとっても日本語ボランティアの活動は有意義なものであったようで、「自分が外国語を学ぶときのヒントになる」「日本人なら言わないであろう彼らの日本語表現に“そういう表現の仕方もあるのか”と新鮮な感動を覚えた」「一生懸命学んでいる留学生の姿勢に触発されて自分も専門の勉強をがんばった」「様々な国籍の人と話をすることに抵抗がなくなった」といった肯定的なコメントが得られた。日本語学習者との日本語での会話を通して、自分が使っている言葉の再発見ができたことや自分自身の学生生活に対する振り返りの機会を持てたことはボランティアの学生にとっても意義が大きかったと思う。

試み④の「会話コンサルテーション」は、多人数の授業時には発見できない個々の学習者のスピーキングの課題を発見し、何らかのアドバイスができないかと思い、筆者が授業外に行った活動である。ここでは、筆者と学習者が1対1で30分ほどの会話を行い、個々の学習者が持つ日本語のスピーキングに関する課題の指摘とその改善にむけてのアドバイスを行った。会話コンサルテーションは、2ヶ月目の終わり頃（10週間のコースの7週目）に希望者に対して実施し、19名がこれを受けた。会話は学習者の理解を得て、テープに録音した。会話コンサルテーションの流れであるが、まず日本語に関する問題点を学習者自身に挙げてもらい、その後、日常的なトピック（出身地、旅行、日本の印象、自分の専門など）について話をし、最後の10分をフィードバックとした。フィードバックの際には、

テープを聞きながら、学習者自身が挙げた日本語の問題点と、筆者が気づいた学習者自身の日本語のスピーキングの長所と短所に関して話し合った。ここでは簡単に、会話コンサルテーションで明らかになったことを指摘しておきたい。

まず、スピーキング能力に学習者間で予想以上の差があったことに筆者はショックを受けた。授業開始から2ヶ月経っていたにも関わらず、個々の学習者のスピーキング能力の把握が筆者にはできていなかった。中には、単語を並べるだけで動詞で文を終わらせることができない学習者もいて、そのことを筆者が指摘すると、日本人とのコミュニケーションでは、自分が最後まで言わなくても相手が文を完成させてくれるので、文を言い終わるということを日常的にしていないということであった。特に、スピーキング能力の低い学習者は授業中の発話も少ないため、彼らの日本語の問題点を多人数の授業で気づくことは不可能に近いと感じた。

もう一つ、会話コンサルテーションで気づいたこととして、スピーキング能力の低い学習者ほど自分の問題点に無自覚で、高い学習者ほど敏感であったことが挙げられる。「ラ行の発音が弱い」「敬語が使いこなせない」「日常のことと自分の専門についての語彙はあるが、その他のことについての語彙が少ない」「複文にするときの文法が使いこなせない」「動詞の活用が苦手な簡単な文法で済ませている」など日本語能力の高い学習者ほど自らの問題点を指摘することができていた。自分の発話をモニタリングすることができれば、授業外でも自分や他の人の日本語を観察しそこから学ぶということが可能になるため、そのような視点を彼らに与える必要性を感じた。

学習者によって抱えているスピーキング能力に関する課題は様々で、それぞれの学習者がどんな課題を持っているのかを少しでも把握できたという点では、会話コンサルテーションを行ったことは筆者にとって有意義であった。

4. おわりに ー授業評価ー

筑波大学留学生センターでは、各学期終了時に共通の紙面による授業アンケートを行っている。本授業に関する評価材料としてアンケート結果の一部を載せたい。アンケートは、期末試験の前の回に行われ、22名から回答を得たが、この中には出席不足や最終試験を受けなかったなどの理由によりF評価になった学習者による回答も含まれている。5に近づくほどいい評価で3は普通、表の中の数字は人数である。

【表2】 中級前期「話す」の授業アンケート結果

	5	4	3	2	1
〔授業内容〕 この授業の内容は適切であった	10	8	2	1	1
〔授業満足度〕 私は、この授業を受講して良かった	12	6	2	1	1
宿題は役に立ちましたか	9	10	2	0	1
先生の教え方はよかったですか	14	6	1	1	0
あなたの日本語をよくするために授業は役に立ちましたか	10	9	1	1	1

また、教科書や教材については、「ちょうど良い」が14名、「少し難しい」が3名、「少し簡単」が2名、「簡単」もしくは「わからない」が1名ずつだった。

アンケート結果を見ると、授業のやり方や宿題についてはおおむね好評のようであるが、この授業に対して不満を抱いていた学生も若干名いることがわかる。【表2】の評価項目に1や2の評価をつけていた学習者は2名の同じ学習者で、彼らの自由記述欄のコメントを見てみると、1人は「授業では教師に自分の日本語の間違いをもっと直してほしかった。他の学習者との会話の練習では自分の日本語がうまくならない」、もう1人は「この授業に限らず中級前期の全てのクラスは人数が多すぎる。この授業で自分は話ができなかった」とコメントしていた。これらの不満は、少人数のクラスでの授業であればかなりの部分が解消されたであろうと思われる。

この授業の授業目標に挙げた3つの目標－①トピックについての語彙を増やし、まとまった内容が話せるようになる、②日常よく接する場面において話し相手や状況に応じた話し方ができるようになる、③話し言葉特有の表現について理解し話せるようになる－についての評価であるが、①と③については授業内容に反映させることができたが、②に関してはそれほど強調して練習することができなかったという反省が残る。②を達成するには、それぞれの場面でどのようなスピーチスタイルで話すのがいいか考えさせ、場面に応じてスピーチスタイルを変えて話す練習をする、また、スピーチスタイルを維持して話す練習をするなどの活動を別途行う必要がある。

本稿では、2007年1学期「中級前期話す」の授業内容の報告と、多人数の授業に対する対応の試みについて述べた。これらの試みの中では宿題の充実とボランティアの活用が功を奏していたように感じられる。また、会話コンサルテーションの実施は筆者自身が学習者のスピーキング能力を把握するのに大いに役立った。学習者同士が話す機会を持つことに関しては、肯定・否定どちらの意見もあったが、否定的な意見がもたらされたのは、この活動の意義を筆者が伝え切れていなかったことにあるとも考えられる。「話す」技能を多人数でやることに限界はあるであろうが、授業改善を行っていくことで、今後も解決の道を探っていきたい。

注

1. 本学の日本語補講コースは、2007年1学期より、開講授業科目が統合・修正され、中級以降の学習者が選択できる授業科目としては、「漢字」「文法」に加え、「読む」「聞く」「書く」「話す」といった技能別の授業が開講されている。
2. 日本語を母語とする筑波大学に在学する学部の学生にボランティアを募った結果、本授業には5名の学生が参加した。
3. 受講していた31名のうち、1名が途中で授業を取り消し、4名が出席数不足、最終試験を受けなかったなどの理由によりF評価となった。

参考文献

- 衣川隆生・加納千恵子・長能宏子・金久保紀子・小池康（2006）『一般日本語 SJ4-1 2006年9月版』筑波大学留学生センター
- 衣川隆生・加納千恵子・長能宏子・金久保紀子・小池康（2006）『一般日本語 SJ4-2 2006年9月版』筑波大学留学生センター
- 富坂容子（1997）『なめらか日本語会話』アルク
- ボイクマン総子・宮谷敦美・小室リー郁子（2006）『聞いて覚える話し方 日本語生中継 初中級編1』くろしお出版
- ボイクマン総子・宮谷敦美・小室リー郁子（2006）『聞いて覚える話し方 日本語生中継 初中級編2』くろしお出版
- Canale, M. (1983) "Communicative competence to communicative language pedagogy." In J. Richards and R. Schmidt (eds.), *Language and communication*. London: Longman.
- Canale, M. and Swain, M. (1980) "Theoretical bases of communicative approaches to second language teaching and testing" *Applied Linguistics*, 1 (1), 1-47
- Scarcella, Robin C and Oxford, Rebecca L. (1997) 『第2言語習得の理論と実践 タペストリー・アプローチ』牧野高吉、菅原永一他訳 松柏社